

人類の出发点

～以下、書評「親指はなぜ太いのか（島泰三 著）」（中村桂子 評）＜毎日新聞 03(H15).9.21＞より～

（青太字は引用者によるものです。）

．．．．なぜ人間の親指は一本だけ離れ、しかも太くて短いのか．．．．初期人類は、サバンナに豊富にあった、大型食肉動物の食べ残した骨を主食にしていた（骨髄は栄養たっぷり）。主食は歯の構造と深く関わり合うのだが、人間の平らな歯列と厚いエナメル質は骨をすり潰すのに適している。とはいえ大きな骨はそのままでは口に入らないので、石で割らなければならない、それを握りしめるのに適したのが他の四本と向き合う太い親指のある手というわけだ。骨を割るための石を常に持つようになれば、当然のこととして二足歩行になる。片手に石、片手に骨を持って安全な所へ行って食事をしたり、時には捕食者に石をぶつけたかもしい。他の生物が利用しなかった骨に眼をつけたことによって、直立歩行という人類特有の行動に入り成功への道を歩いた．．．．。主食と手と歯に深い関係があり、野生生物は主食によって棲み分けている．．．．。ある生態系の中で他の生物が利用していないものを主食にした時、種として安定した地位（これをニッチという）を得られる．．．．。霊長類では、主食が手と口の形を決め、それが種としての独自性に関わるという〔のが〕「口と手連合仮説」．．．．。